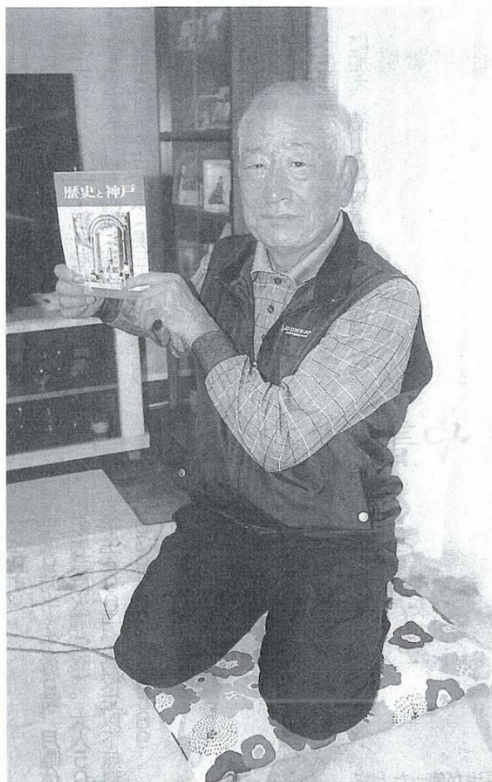
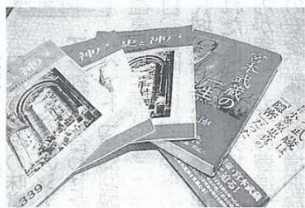


時をかける



私の宝物



武蔵について書いた著作や論文が掲載された月刊誌

武蔵の研究「我流」で20年

歴史愛好家

濱田 昭生さん 75歳 (明石市西明石町1)

会社員だった50代に、それまでのキャリアが通用しない別会社への出向を命じられた。「統率力」や「リーダーシップ」について学ぶ中で、孫子の兵法と出合った。兵法の一節「百戦百勝」を体現した人物は誰か。思い浮かんだのは剣豪・宮本武蔵だった。「生涯で六十数回剣を交えて、負けは知らず」。以来20年、いまだに謎の多い武蔵の半生に熱い思いをはせる。「武蔵じゃないんですが、歴史研究に師匠はいない。全部、我流なんです」。文献を読みあさり、論文を書き続ける。

明石に滞在した武蔵が大きな役割を果たしたとされるのが、明石城築城時の城下町の「町割り」。今で言う都市計画だ。

「武蔵がなぜ、明石に」との疑問には、茶人としても知られる初代城主・小笠原忠政(後の忠真)との関係に着目した。「文化人としての武蔵は、明石に滞在した間、忠政の下に集まった文化人と交流する中で育まれた」との論を張る。

史料に残っていない武蔵と文化人との接点を、宗教者や大工、庭師や軍学者らが出入りした明石城の築城時に見いだす。「一大転機を迎えるほどの出会いがあったに違いない」。

武蔵の著書「五輪書」の謎にも迫る。4巻まで兵法の実験論を展開し、5巻で突如、「少しも曇りがなく迷いの雲の晴れた状態こそ、真の空である」と読者を煙にまくような文言を記す。

「身体の鍛錬だけでなく、精神面の修練を重ねる重要性を説いた。その境地は明石での出会いがあればこそ達することができた」と力説。最新の成果をまとめた論文は、識者に「『五輪書』の読み方の幅を広げた」と評された。

「まだまだ調べたいことが山積み」。笑顔の奥で「真の空」を求める情熱がたぎる。(小西隆久)